

# ヤスパーズに於ける『形而上学的

## 対象性』

青森県立板柳  
高等学校教諭 川口光勇

### 一、包括者存在論

内在的思惟に於て直接に可視的な物を示し、対象的解明を与える存在論に対して、ヤスパーズの存在論は、「超越する思惟に於て間接的に出合うものを感得せしめる」(Von der Wahrheit, S. 160) 以下引用書はこの書を示す。所の「非対象的解明」(ebd.)を与える、「包括者存在論 Periektologien」(ebd.)である。

彼の存在論においては、ここに存在一般は、包括者 das Umgreifende の存在である。

この包括者は、①われわれである包括者と、②存在そのものとの包括者の諸空間(七空間)に分岐する (vgl. S. 46-47)。

前者においては、「世界存在におけるそして超越者における限界」(S. 107)をもち、この世界は、対象存在と共に、人間に対する「超越者の言語の諸の場所 Stätte der Sprache der Transzendenz」(S. 108)にある。一方「あらゆる包括者の包括者

das Umgreifende alles Umgreifenden」(S. 110)たる超越者は、「決して世界とはならないが、しかし世界における存在を通じて言わば語る」(Jaspers, Der philosophische Glaube, S. 17.) であり、それは実存に対して、「先ず第一にあらゆる世界存在の暗号文字として現われる」(S. 135)。これに対して超越者へ関係することによって、自由なる自己存在がそれにおいて、自らを理解する思惟は、まさにそれは「実存的思惟 existentielles Denken」(S. 266)なのである。

以上叙述せし背景には「それらは(存在論乃至形而上学)、実際において、対象的知において汲み盡くすことは出来ない。……却つてそれらは存在の暗号文字である」(Jaspers, Einführung in die Philosophie, S. 34)と云う実存の立場があり、この自己存在の実存の明瞭が、その根拠になっている。

### 2. 形而上学的対象性

思惟は、主観—客観—分岐に於て包括者の諸様式に結ばれている。そしてそれは一なる存在の諸の包括者の様式に、その都度、それに対応する諸対象性の意味と形態に関係する。

と云うのは、「思惟と存在は不可分に相互に関係」(S. 275)する。従つて思惟に対応するところの「対

象徴は、同じ仕方において存しない」(S.255)。われわれは、そこに包括者様式の本質的区別のあることを知り得る。

ヤスパースは、思惟に対する対象性の面として三つをあげている。即ちそれは「認識対象」と「形而上学的対象」と「実存の記号の対象」とのそれである。

対象性の一つである「形而上学的対象性」は、超越者を、実存の意識に於て、了解するところの言語の機能「(Jaspers, Philosophie, S.679)」である。

且つ又「あらゆる対象は、超越者の可能的言語として、対象となる。対象は本質的に実在する客観ではなくて、象徴 *Symbol* としての客観である」(S.256)。

### 3. 暗号 解読

さて、「形而上学的対象に於て、他者即ち存在自身は、現在のである。対象は対象自身として存在せず、却つて対象において存在が思念される。形而上学的対象は、暗号であるか消滅する対象かである」(ibid.)。と云うのは「消滅することにおいて、思惟の移り行きにおいては、対象的なもののなかで感得される」(S.257)。

それは、超越者が対象性をもって現象する時、実存にとつてのみ、これが消滅することによって可能となる。

それは、形而上学的対象性の中に、超越者がその都度実存にとつて現実的に現われる。勿論それ自身は、決して意識一般の対象とはならない。

あらゆる存在は、象徴的なものとして暗号たりうる。そして、この暗号として語りかけて来る言語は、三種に区別される。

第一言語は実存の絶対的意識の中で聴取する「超越者の直接的言語」(Philos. S.786)であり、それに第二、第三の各言語がある(以下説明省略)。

この「暗号解読は、常に同一平面上では行われない」(S.1037)。そして「諸の暗号は、まさに人間の変化によつて始めて現われる」(ibid.)。人間の変化とは、他ならぬ実存の深化を意味する。そして暗号解読の要義性が、可能である。暗号解読は「空想は実存の実現に対する積極的条件である」(Philos. S.538)と云うものが、働いているから可能になる。(これについては、斎藤武雄教授著「ヤスパースにおける絶対的意義の構造と展開」一五二頁以下に詳しく論述されている)。

以上の如く、実存は、暗号という形而上学的対象性において、超越者に接触しそれを感得し、それによつて暗号は超越者によつて光輝を発する。

まさに「根源的哲学思想は、暗号である」(S.1038)

という積極の意味をもって来る。

参考文献

1. 斎藤武雄教授著「ヤスパースにおける絶対的意識の構造と展開」(昭和36年版)創文社
2. 同著者「ヤスパース研究」(昭和37年版)理想社